

教育学部教職支援室の活動報告（3）

著者	森藤 悦子, 青木 利博
雑誌名	鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要
巻	28
ページ	181-186
発行年	2019-03-29
URL	http://hdl.handle.net/10232/00030577

教育学部教職支援室の活動報告（3）

森 藤 悦 子 [鹿児島大学教育学部（教育心理学）]

青 木 利 博 [鹿児島大学教育学部教職支援室]

A report on the activities of a teaching profession support room (3)

MORIFUJI Etsuko and AOKI Toshihiro

キーワード：教員採用試験、開始時期、一次合格、キャリアガイダンス

1. はじめに

ここ数年高かった教員採用試験の倍率も少しずつ低くなってきているが、ばらつきが大きい。教員採用試験の方法・内容は多様化しており、前年度とは異なる方法をとる都道府県もあり、従来の過去問を参考にする方法では対応が難しくなっている。多様化する試験に対して、早い段階で就職先の情報を入手し対策をとることが、必要となってくる。多様化した内容を自分で納得するまで学習し、試験を受けるということは学生にとって容易なことではない。このような状況下、教員を目指す学生に対し、少しでも力になればと教職支援室では支援を行っている。

今回は、教職支援室の利用状況、教員採用試験一次合格との関連、学生の教師に対する意識と教員採用試験に対する取り組みについて報告する。

2.1. 支援体制と支援内容

教職支援室は、現在特任専門員1名が週5日30時間の勤務体制の中で学生の支援を行っている。特任専門員は本年度交代し、利用者の増加により対応時間も昨年度より週5時間増加している。現在の特任専門員は小学校、中学校、高等学校、二度の日本人学校勤務経験（教諭、校長）があり、中学校の校長経験者である。また、鹿児島県庁（知事部局）国際交流課での行政勤務経験もある。

学生のニーズに応じて教職に関する支援を全学対応で実施している。支援内容は、教職に向けてのキャリアガイダンス、教員採用試験対策、資料や書籍の整備・貸出などである。相談等を実施する場所は、教育学部事務・理系研究棟1F学生支援ゾーンの教職支援室である。相談は原則として対面で予約制であるが、予約のない時間は随時受け付け、状況に応じてメールでも対応している。

2.2. 利用状況

表1は、平成28年度以降の月別利用回数である。学生係とも連携し新入生のオリエンテーションや3・4年生対象の就職ガイダンス、ポスター掲示などで支援室の紹介を積極的に行っている。この結果、教職支援室の存在も学生に認知され利用回数も増加したと考えられる。本年度は特に7月は20日以降に59回、8月は161回の利用があり集中した。利用理由は、教員採用試験二次対策で

あった。9月に減少するのは、教員採用試験もほぼ終了し、教育学部では実習に入るためである。10月に増加するのは、実習が終わり来年度の採用試験に向けて3年生が動き始める時期になるからと考えられる(表7-2参照)。

表2は、学部別の利用回数である。前年度の報告では、平成27～28年度の割合は教育学部82%他学部18%であった。平成30年度の前期は教育学部64%他学部36%であり、全学対応のため他学部の割合が増加している。他学部では教員を目指す学生が少なく、教員になるための情報や支援が学部ではほとんど得られないため、教職支援室を頼りにしていることが考えられる。

2.3. 教員採用試験一次合格との関連

表3は、継続利用者の一次合格状況(報告のあった者)である。平成29年10月以降の継続利用者は13名であり、全員が本年度の教員採用試験の一次に合格した。表4は、その内訳であり教育学部生が54%、他学部生が46%であった。表5は、継続利用者(一次合格者報告者)の平成29年10月から平成30年8月末までの利用回数である。平均すると17回であった。30回以上も2名いた(農学部と法文学部)。継続することが一次合格への近道であると考えられる。

表1 月別利用回数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
28年度	38	37	50	43	66	19	56	34	31	23	41	44	482
29年度	45	37	50	53	76	15	43	21	14	22	11	15	402
30年度	21	35	37	110	161								364

表2 平成30年度前期の学部ごとの利用回数

	教育	法文	理	農	水産	工	計
利用回数	233	69	22	23	13	4	364
割合	64%	19%	6%	6%	4%	1%	100%

表3 継続利用者の合格状況

継続利用者数 (29年10月～)	一次合格 報告者数	割合
13	13	100%

表4 継続利用者の学部

	教育	法文	理	農	計
人数	7	4	1	1	13
割合	54%	31%	8%	8%	100%

表5 継続利用者の利用回数(一次合格報告者)

回数	1～5	6～10	11～15	16～20	21～30	30以上	計
人数	1	4	2	2	2	2	13
割合	8%	31%	15%	15%	15%	15%	100%

3.1. 教師に対する意識と教員採用試験に対する取り組みについて

今後の教職支援の在り方を検討することを目的として、教育学部進学の原因と現在の状況、教師に対する意識、ならびに教員採用試験に対する取り組みについてアンケート調査を実施した。

3.2. 方法

(1) 調査対象者：教育学部学生 159 名

(男性 71 名、女性 88 名、2 年生 59 名、3 年生 66 名、4 年生 34 名)

(2) 調査期間：平成 30 年 7 月～8 月

(3) 調査方法：授業後、勉強会后、教職支援室での相談後にアンケート用紙に記入

(4) アンケートの内容

- ① 教育学部進学の原因と現在の状況
- ② 進学・就職のための準備開始時期
- ③ 進路に関して誰に相談するか
- ④ 採用試験のプレッシャー
- ⑤ 教師の地位

3.3. 結果と考察

アンケートに答えた学生の性別と学年の間には有意な差はみられなかった ($\chi^2=3.58$, $df=2$, $p>.05$)。

① 教育学部進学の原因と現在の状況

表 6 は、回答した学生の教育学部への進学の原因と現在の状況である。教師を希望して進学してきた学生は回答数の 54% であり、教師が選択肢の一つだったと答えた学生は 25% であった。現在の状況では、教師を希望している学生は 55%、すでに公務員・企業へ就職を希望している学生が 27%、迷っている学生が 16% である。また、教師を希望して入学してきた学生の 86% が現在でも教師を希望している。進学原因と現在の状況とは相関が見られた ($r=0.535$, $p<.01$)。教師希望で入学してきたにもかかわらず教師になるかどうか迷っている学生も 8% いる。現在の状況では教師が選択肢の一つで進学してきた学生の 23% が教師を希望し 40% が公務員や企業を希望している。また、迷っている学生も 33% いる。

② 進学・就職のための準備開始時期

表 7-1、表 7-2 は、進学・就職の準備状況である。準備をしていると答えた学生のうち一年次から準備を始めた学生が 13%、三年次実習前が 33%、実習後が 30% である。していないと答えた学生も実習前には 41%、実習後には 46% が始めようと考えていることが分かる。

これまでの経験をふまえると実習前に始めたという学生もほとんどが過去問をしている程度であり、計画を立てて学習している学生は少なかった。迷っている学生には、本人の考えをじっくり聴き、教師の仕事の内容、教師ならではの楽しさ、大変さなどを伝え、自分で選択できるようカウンセリングを行った。実習後の相談では、採用試験を受けたいが何をどうしていいかわからないという相談が多かった。また、どの有料の講座を受ければよいかとの相談もあった。教職支援室に相談に来る学生の多くは、相談に来るまでに学部で作られている教員採用試験の手引きの存在も知らず

読んでいなかった。このような場合は、教員採用試験の手引きを一緒に読むことから始め、その後受験したい地区の採用状況と採用試験の内容を調べ、何をいつまでにどの様に学習していくかガイダンスを行った。計画立案後は、うまく学習が進んでいるか学習経過を報告に来てもらい、その都度悩みを聞いて解決していくという流れであった。大学祭などの行事に流され12月になって慌てて相談に来る学生もいた。教育学部主催の教員採用試験対策講座の紹介と講座の活用方法を指導することも多かった。合格した学生の中から「採用試験の勉強を始めてから授業と採用試験のつながりが分かり、どの授業もすべて教師になるために必要と感じられ、主体的に授業を受けるようになった。そのため授業が充実したものになった。もっと早めに採用試験の勉強を始めていればよかった。」という声が多く聞かれた。教師を目指すためには教員採用試験は避けて通れないものである。そのため、一般教養をになう共通教育も含め、大学の授業をどれだけしっかり受けておくことが大切かを伝える機会を早めに作る必要があると考える。

表6 進学理由 と 現在の状況

進学理由		希望	選択肢	資格	国立大	地元	親	教師	その他	合計
現在の状況	希望	74	9	1	2	0	0	1	1	88
		86%	23%	14%	33%	0%	0%	50%	8%	55%
	迷っている	7	13	2	1	0	1	1	0	25
		8%	33%	29%	17%	0%	25%	50%	0%	16%
	公務員	4	8	4	1	1	1	0	6	25
		5%	20%	57%	17%	50%	25%	0%	50%	16%
	企業	1	8	0	2	1	2	0	4	18
		1%	20%	0%	33%	50%	50%	0%	33%	11%
	その他	0	2	0	0	0	0	0	1	3
		0%	5%	0%	0%	0%	0%	0%	8%	2%
合計		86	40	7	6	2	4	2	12	159
		54%	25%	4%	4%	1%	3%	1%	8%	100%

表7-1 準備を始めた時期

表7-2 準備を始める時期

始めた時期	準備を始めた時期						始める時期	準備を始める時期					
	1年次	2年次	実習前	実習後	4年	計		1年次	2年次	実習前	実習後	4年	計
人数	8	7	21	19	8	63	人数	0	11	39	46	0	96
割合	13%	11%	33%	30%	13%	100%	割合	0%	11%	41%	48%	0%	100%

③ 相談者

表8は、進路に関して今後誰に一番相談するかについてである。一番多かったのが52%の家族であった。大学教員へは10%であり支援室はわずか4%であった。まずは身近な家族に相談し、その後具体的な内容について大学教員・支援室に相談するのではないかと考えられる。迷っている学生のうち25人中4名が誰にも相談しないと答えている。このような学生に対しての細やかなガイダンスの積み重ねが教師希望へもつながっていくと考えられる。採用試験一次後に二次対策に駆け込んでくる学生は、教職支援室のことを知らなかったと答える場合が多い。継続的な支援のためにも、また7月8月に相談者が集中しないためにも早い段階から教職支援室を利用するように働きかける必要がある。

表8 誰に相談するか

	しない	家族	友人	先輩	大学教員	支援室	その他	合計
人数	10	82	25	17	16	6	3	159
割合	6%	52%	16%	11%	10%	4%	2%	100%

④ 教員採用試験に合格するということへのプレッシャー

表9表10は、教員採用試験合格へのプレッシャーについてである。教育学部生として教員採用試験に合格するという事に教師希望の学生の74%、迷っている学生の68%がプレッシャーを感じている。自分からのプレッシャーが一番多く、次が家族と社会であった。自分で自分を追い込んで苦しくなっている学生も多い。前年度の報告では、教職支援室を利用した学生の全員が利用後の気持ちに変化あったと回答しており、その内訳は「やる気がでた」が最も多く、次に「安心した」「不安が軽減された」「気が楽になった」となっていた。このことから、プレッシャーを感じていた時によく利用していたことが分かる。

表9 現在の状況とプレッシャー

現在の状況		感じる		感じない		受けない		計
	希望	65	74%	23	26%	0	0%	88
迷っている	17	68%	8	32%	0	0%	25	
公務員・他	8	17%	5	11%	33	72%	46	
計	90	57%	36	23%	33	21%	159	

表10 プレッシャーを与えるもの

		自分	家族	社会	その他	受けない	合計
学年	2年	29	14	9	3	4	59
	3年	20	16	16	3	11	66
	4年	15	4	8	1	6	34
合計		64	34	33	7	21	159

⑤ 教師の地位

表 11 性別 と 地位

表 11 は、教師の社会的地位を高いと思っているかについてである。学年間、現在の状況間では有意差が見られなかったが、性別では女子学生のほうが教師の地位が高いと思っていることが示された ($\chi^2=4.75$, $df=1$, $p<.05$)。

性別	地位		合計
	高い	思わない	
女性	50	38	88
男性	28	43	71
合計	78	81	159

4. おわりに

教職支援室からの報告も3回目になった。利用回数ならびに他学部の利用も増加してきている。現在は教育学部の設置であるが、全学部を対象としている以上、大学の就職支援の一環としての位置づけを考える必要があるのではないかと考える。そうすることによって、教員採用試験の手引きを希望する他学部生にも渡すことができるのではないかと考える。

教育学部に教師希望で進学してくる学生の多くは、そのまま教師希望が多いことが分かった。教師の地位を高いと思っているのは、女子学生に多かったが、教師の地位を高いと思っていなくても教師希望の学生が多いことから、教師という職業に魅力を感じている学生が多いことが考えられる。現在の状況では、教師が選択肢の一つで進学してきた学生の23%が教師を希望し、40%が公務員や企業を希望している。迷っている学生も33%おり、入学時に教師が選択肢の一つであった学生をいかに教師希望に導いていくかが、本学の教員達成率70%への大きなカギになると考えられる。特に迷っている学生を教師希望に導くためにも学生のキャリアカウンセリングの場として教職支援室を活用してもらえたらいいのではないかと考える。

これまで様々な機会をとらえて教職支援室の紹介をしているにも関わらず、一次試験直後に駆け込んでくる学生の中には、教職支援室の存在をそれまで知らなかったと答える学生も多かった。大学教員の中には早い段階で教職支援室を学生に紹介される先生、じかに学生を連れて来られる先生もいる。そうして来室した学生には継続した指導をしている。教員採用試験は単に合格するためだけにあるのではない。教員採用試験の学習を通して、教育公務員になるということの責任の重さを自覚する(認識する)とともに、自己理解を深め、自分なりの教師観や指導観などを確立していくことが重要であると考え。その支援をすることが教職支援室に求められる大きな役割ではないかと考える。そのためには早期から継続した指導が必要である。

同様の支援をしている大学教員の方々もいるが、教職支援室との連携はあまりなされていない。早期からの支援を行うためにも学生係だけでなく、今後は就職委員会や大学教員との連携を行い、系統的な学生への支援が必要であると考え。

引用文献

森藤悦子, 土田 理 (2018) 「教育学部教職支援室の活動報告 (2)」 鹿兒島大学教育学部教育実践研究紀要 第27巻 pp. 339-345